

科目名	広島と世界
単位数	2.0
担当者	井上泰浩(コーディネーター)、ヴェール、ウルリケ、太田育子、大場静枝、金栄鎬、武田悠、田浪亜央江、秦野貴光、藤原優美、古澤嘉朗、古江貴文
履修時期	後期
履修対象	博士前期課程1、2年
講義形態	講義
講義の目的	非人道的であると日本では理解されている原爆は、攻撃を行ったアメリカでは一般的に賛美・正当化されるなど、国によってとらえ方はまったく異なる。アメリカ、フランス、ドイツ、イギリス、中国、韓国、中東アラブ、ラテンアメリカなど世界では、原爆と広島・長崎への使用が、そして、核廃絶や核抑止論がどのように理解されているかについて、歴史、文化、そして政治制度や安全保障政策などの視点で考察していく。原爆理解の多様性と変化を検証するとともに、核兵器禁止条約が発効した世界の動きや核による安全保障政策に対する理解について探る。
到達目標	多様かつ国際的視点で広島と原爆、そして核問題を理解できるようになる。具体的には、現在、世界では原爆がどのような枠組みで報じられているか(例 救世主、戦争犯罪)、(2)原爆の実態(民間人の犠牲、凄惨な人的被害や放射能による今も続く被害など)がどの程度伝えられているのか、そして、(3)以上のことに各国や地域の文化や歴史などがどう影響しており、安全保障や平和政策にどのように反映しているかなどを学ぶ。
受講要件	すべての大学院生
履修取消の可否	可
履修取消不可の理由	
事前・事後学修	事前に配布もしくは指示された文献や資料を熟読して受講すること。
講義内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業概要 原爆は人命を救ったのか戦争犯罪なのか(井上) 2. アメリカ 根づいた原爆神話と変化の兆し(井上) 3. イギリス 原爆に対する世論と政策の乖離(井上) 4. フランス 核抑止力と核兵器廃絶のはざままで(大場) 5. ドイツ「平和利用」と「アウシュヴィッツ」への視座(ヴェール) 6. ロシア 露外交と核兵器(秦野) 7. 中国 中国における原爆理解(藤原) 8. 韓国 植民地支配の記憶、保守vs.進歩の理念論争(金) 9. 中東アラブ ヒロシマの記憶と中東非核地帯構想の背景(田浪) 10. ラテンアメリカ 非核地帯化構想とヒロシマ報道への影響(古江) 11. 広島市の戦後復興:平和構築(支援)への視座(古澤) 12. 核のタブー:核兵器へのイメージの国際比較(武田) 13. 核兵器禁止条約と核被災の語り(太田) 14. 研究発表(井上) 15. 研究発表、まとめ(井上)
期末試験実施の有無	実施しない
評価方法・基準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への積極的参加と研究プレゼンテーション=60% ・ 小論文(興味のある国や地域などを選択して、リサーチペーパーを作成する。そのテーマをプレゼンテーション。該当する担当者より指示を受ける)=40%
教科書等	教科書: 井上泰浩編著(2021)『世界は広島をどう理解しているか 原爆75年の55か国・地域の報道』中央公論新社。 参考書: Rinnert, Carol, Omar Farouk & Yasuhiro Inoue (Eds.). (2010). Hiroshima & Peace. Hiroshima, Japan: Keisuisha.
担当者プロフィール	
講義に関連する実務経験	
課題や試験に対するフィードバック	ペーパーは担当教員が採点后に返却する。
アクティブ・ラーニング	文献調査と批評、プレゼンテーション、ディスカッション
キーワード	原爆、原爆投下・攻撃、原爆神話、広島、長崎、核兵器、新聞報道、フレーミング、メディア・フレーム、対日意識・世論、戦争終結・人名救済、戦争犯罪・無差別殺戮、抑止論、核廃絶、核政策、平和構築、非核地帯、核兵器禁止条約
備考	広島と核の問題を幅広い視点で考察する授業であり、大学院専攻に関わらず受講を勧める。また、「ヒロシマ」を学ぶことに興味のある留学生の受講も歓迎する。なお、授業15回のうち、1-数回程度の日時の再調整が予定されている。